
ゆーねー

HERMES

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆーねー

【Nコード】

N0278F

【作者名】

HERMES

【あらすじ】

「私の家を探して下さい」霊能力者の男の元に、突然記憶をなくしたという女の幽霊が現れた。このままでは成仏できないということで、男は協力し、家を探し出すが……

1話

僕ですか？ ただの一般人ですよ。

え？ 霊能者？ ああ……昔の話です。今はもうやってませんよ。何で止めたのか……そうですねえ。まあちょっと昔の話なんですが

男は霊能力を持っていた。幽霊を見るだけでなく、話したり触ったりもできた。

そんな能力を、男は世の中のために役立てようと、事務所を開いた。

男はその能力で除霊や占い、また、成仏できなくなった幽霊を成仏させる、などの仕事をしていた。

ある日のこと……男の元に、一人の女が現れた。

「あー」

「はい、すみませんが今日はもう閉店です。……いや、幽霊さんでしたか」

一見すると普通の人間だが、男にはすぐに分かった。人間とは違い、薄く透けて見えたから。

「あなた、やっぱり私が見えるんですね？」

「はい、いちおう霊能力者ですから」

霊能力者とは、人間と幽霊をつなぐ案内人のようなものだと思はれている。

そんなわけで、男のところに来るのは人間ばかりではなく、幽霊が訪ねてくるというのも珍しいことではなかった。

「実は、相談があつて来たんです」

「なんでしよう、成仏ですか？ だったら、すぐにも始められませんが……」

「いえ違つんです」

女は慌ててそれを否定した。

「私、一年ほど前にいきなり交通事故で死んでしまつて。夫と子どもがいたんですが……それ以来、家族の顔を見に行つてないんです。だから、一目会いたくて」

「なるほど。ご自分の家は覚えてますか？」

女はうつむき、悲しそうな表情で

「それが……分からなくなつてしまつて」

未練を残して死ぬと幽霊は成仏できない。だが、その未練が何なのかすら忘れてしまつたということもたまにある。

そうなると厄介で、そのまま成仏できずにこの世をさまよつてしまつてしまう。

男は納得して

「なるほど……それでは、あなたの家を探せばいいのですね？」

「はい、お願いします」

そう言い残し、消えていった。

1話（後書き）

話はさくさく進んでいきますんで気楽にどうぞ^^

2話

次の日。

女の家は意外と簡単に見つかった。まだ新しいきれいな家だった。とりあえず、外から中の様子を伺ってみる。

広いリビングが見え、3人……いや4人が仲良く食事をとっている姿が見えた。

おそらく旦那だと思われる若い男と、小学生ぐらいの子ども。

それに、旦那の隣には別の若い女がいて、赤ちゃんを抱えている。傍目にはとても円満そうな家庭だが……。

「再婚、してたのか。おまけに赤ん坊まで……」

まあ前の妻を亡くしたと言っても、旦那の人生はまだまだ長いし子どもも小さいので無理もない。

……女がこの事実を知ったらショックを受けるだろうか。男は悩んだ。

ただ、こういうことははっきり言うべきだと男は思った。

「仕方がないか。現実は厳しいもんだ……」

男は帰って女に正直に話すことにした。

そして、帰ろうとした時、妙なものが目に映った。

「ん？ 塩……？」

家の玄関の前に、塩が盛られていた。

それもまだ新しい。おそらく今日の朝に盛られたものだろう。

ただ、塩は玄関だけにあるのではなかった。
家の周りのあらゆる場所に盛り塩がされてあった。

「……変な家だな、ここは」

一見、普通の家。

だがよく見ると、裏口や庭にも。16方位すべてに塩が盛られてある。

どうみても異常な光景だった。

「こんな盛り塩なんかしてたら、幽霊が入ってこれないじゃないか……いや、そうか」

清めの塩は、古典的だが幽霊には大きな効果がある。ぶっかけられると、強制的に浄化されてしまうほどに。

女が自分の家を思い出せなかったのも、この塩のせいだろう。

男は、そっと玄関の前の塩をどかした。

「これで、あの幽霊も家の場所を思い出せははずだ」

だが、思い出せたとしても、もう女の旦那には新しい妻がいて、赤ん坊までいる。

その現実を、女が受け入れて無事に成仏できるかどうか……。

男は気が重くなりながら事務所に帰っていった。

3話

「私、やっと自分の家を思い出せたんですよ！」

事務所にはすでに女がいた。

嬉しそうに記憶を取り戻したことを語る。

塩をどかしたせいだろう。きつとあれが思い出すのを妨害していたに違いない。

「そうなんですか、よかったですね。それはそうと……実は、僕はさっきまであなたの家に行ってたんですよ」

「そうなんですか。それで、どんな様子でした？」

「それが……」

男はさっきの光景を女に話した。

旦那には、すでに新しい妻がいること。どうやら、家庭は円満な様子だったということ。

そして、女には早く成仏することを勧めた。

「きつい言い方ですが、あなたはもう死んでいますし……生前のことはさっさと忘れて、成仏した方が幸せだと僕は思います」

「……そうですか」

やはり動揺は隠せないようで、女の表情に陰りが見えた。

「まあ、時間はあります。ゆっくり考えてください」

まあいきなり言われても気持ちの整理がそう簡単につくはずはない。

仕方のないこととはいえ、女からすれば裏切られたとも言えるかもしれない。

しばらく沈黙が続いた。女は顔を伏せ、椅子に座り込んだままだ。男はそれを黙って見ていた。

自分に言えることなど何も無い。それを理解して、ただ時間が過ぎるのを待った。

そして、女が口を開いた。

「……でも、やっぱり会いに行きます」

覚悟を決めた顔。決心がついたようだ。

「そうですね」

それはそれでいいと思った。すっきりして成仏できるなら、それに越したことはない。

「じゃあ行きましようか、あなたの家に」

そう言い、男は彼女を家に案内する。

だが、男は気づいていなかった。

女の思惑に。

女は嘘はついていなかったが、いくつもの隠し事があった。

自分の家は覚えていなかったが、自分がどの地域に住んでいたかは覚えていた。

本当に一目会いたいだけなら、近所でまちぶせしていればいいだけの話だ。

そして夫が、自分が死ぬ前から浮気をしていたのも知っていた。

女は、浮気相手のことを徹底的に調べ上げていた。仕事、年齢、趣味、習慣……。

計画は今日、完成する。

女は一人、口端を歪ませて薄ら笑いを浮かべた。

4話

男はまた、家の前まで来ていた。

「ここですよね」

「はい、ああ……懐かしい」

女はさも嬉しそうに家を見上げる。

「それじゃあ、会ってきますね。しばらくの間、家の中で夫と息子を眺めていますから、あなたもどこかで時間を潰してください」「そうですか。じゃあ1時間ぐらいで。どうぞごゆっくり」

そう言っつて男は歩き出した。方角からして、近所のデパートにも行くのだろう。

女はそれを見届け、家の中に入っていった。

もちろん、女は幽霊なので、男以外の人間にその姿は見えないし壁もすり抜けられる。

庭から壁をすり抜けて中にはいると、リビングだ。

中では女の家族……いや、それに旦那の新しい妻と赤ん坊がくつろいでいる姿が見えた。

「おぎゃーおぎゃー」

「おーよしよし。いい子でちゅね」

新妻が赤ん坊にミルクをあげていた。それを優しそうに見つめる

旦那。

「だいぶ飲むようになったなあ……また大きくなったんじゃないか

「？」

「この間体重はかったら、また重くなつてたのよ」

赤ん坊は新妻の腕の中で毛布にくるまり、ほ乳瓶を吸っていた。

「お義母さん、僕もミルクあげたい！」

子どもは赤ん坊に興味津々のようで、ずっと見上げていた。

「はいはい、それじゃタクちゃんもあげてみて。優しくね」

新妻がそう言ってほ乳瓶を渡し、子どもは椅子にのって慎重に赤ん坊にミルクをあげていた。少し緊張している様な、嬉しそうな顔。

「うわ、すごい勢いで飲んでる」

「元気な証拠だな。タクもお兄ちゃんになるんだから、ちゃんと面倒みるんだぞ」

旦那は嬉しそうに、そんな家族の様子を見つめている。

幸せな家庭の姿がそこにあつた。

そして、それを部屋の天井近くから見下ろしている女。

その目は鋭く細められ、信じられないほど冷たく、憎悪に満ちていた。

5話

一方男は、デパートの喫茶店でコーヒーを飲んでいた。

1時間では他にすることはないだろう。さっき買った雑誌を読みながら、ただぼーっと時間を潰していた。

「……でね、そうなのよ」

「まあ、大変ねえ」

隣のテーブルでは、主婦が世間話をしている。どうせ暇なので、気晴らしにその会話を聞いてみることにした。

「うちの子も全く勉強せずに遊んでばかりでねえ……進研ゼミでもやらせようかしら」

「あら、部活も彼女も受験も勝ち組になるんじゃない？」

「そうねえ……あーでも、うちの子来年から社会人だったわ」

「何がしたいのよ」

どうでもいい話が続く。

まあこれはこれで暇つぶしにはなった。

「そうそう、この間、うちにタクちゃんが遊びに来たのよ」

「タクちゃんて……あの家の？」

「そうそう。あんなことがあって、今度はいきなり父親が再婚したでしょ？ 私も心配だったんだけど……意外と元気そうだったわ」

「そうなの……でも可哀想ねえ。まだ小さいのにお母さんが亡くなつて」

健気な話だ。男はコーヒーをすすりながら思った。

「いや……タクちゃんとしては、あれで良かったんだと思う、私は」
「どういうこと？」

「あのね、今だから言えるけど……タクちゃん、死んだあそこの母親に虐待受けてたみたい」

「ええ！？」

男は一瞬、コーヒーを飲む手を止めた。

話は意外な方向に進んでいった。

「それ本当なの？」

「うん、タクちゃんうちによく来てたんだけど……足や腕にいつ見てもアザみたいなのが出来た。……聞いた話だと、死んだあそこのお母さんて癩癩持ちで、常に精神的に不安定だったて」

「ああ、私も聞いたことあるかも、その噂。突然怒り出したかと思うと、しつけどって言ってニヤニヤしながら飼い犬を蹴飛ばしてたつていうのを見た人もいたわね」

「あの人の場合、そういう性格というより性癖ね。もう愛情表現がそのまま暴力になって……タクちゃんも旦那さんも相当ひどくやられてたみたいね。旦那さんは夜まで帰ってこないから、それまで止める人はいないし……」

「本当にねえ……こういつちゃ何だけど、タクちゃんはお母さんが死んで救われたのね」

「そうみたい。新しいお母さん、知ってる？」

「知らない。どんな人？」

「いい人よ。優しくてきれいな人だった。最近、赤ちゃんが生まれたいらしいけど、血が繋がってないタクちゃんとも仲良くやってみたいだしね。タクちゃんのアザも消えたわ」

「そうなんだー。旦那さんも一安心ね」

「そうそう」

「……………」

男は肝を冷やした。

なぜなら、全く同じシチュエーションを知っていたから。

死んだ元妻。旦那と子どもと、優しいそうな新妻。そして赤ん坊が生まれたことまで、今自分が関わっている話と同じだった。

まさか…………。

「あら、もうこんな時間？ そろそろ行きましょうか」

「そうねえ。これからPTA会議だわ」

「あっ……………」

もう少し話を聞きたかったが、主婦二人はそう言って席を立った。

「……………」

時計を見る。もうすぐ1時間が経とうとしていた。

男も席を立って、家の前まで戻ることにした。

6話

女は、新妻を見つめていた。

今、旦那の愛を一心に受け、血が繋がっていない息子のタクにも愛情をそそぐ、良妻賢母という言葉がよく似合う女。

赤ん坊は今、ミルクを飲んで眠っていて、タクはどこかへ遊びに行った。

旦那と新妻は二人、リビングでお茶を飲んでいた。

「……………それにしても、お前が来てくれてからなにもかもがうまくいってる気がするよ」

「あなたも頑張ったでしょ？　今まで散々苦勞してきたんだから」

新妻は旦那の肩に頭を乗せてもたれかかり、甘える。

旦那はそれを優しく受け止めて頭をなでた。

「まあな。タクもお前に懐いてるみたいだし、良かったよ、とにかく」

「タクちゃんはいいい子よ。もうお母さんて呼んでくれるし、赤ちゃんも可愛がってくれてるみたいだしね」

「ああ。……………タクには前の嫁の時に、随分つらい目に遭わせたからな。どうなるか不安だったけど」

「……………アザ、だいぶ消えたみたいね」

「ああ……………」

旦那は昔を思い出していた。

前の妻と結婚したのは5年前のことだった。当時は、美人で礼儀正しい彼女の本性を知らなかった。

おかしいと感じ始めたのは、当時飼っていた犬が死んだときだ。

あのとき家には彼女しかいなかった。

彼女は、自分が犬を見に行つた時には既に死んでいたもので、病気だつたのだらう、と言つたが、後で獣医に診せると、明らかに虐待の痕があつたと言つた。

そして、決定的だつたのは、タクが生まれてから。

夜遅く帰つてくると、いつもどこかに怪我をしているタクの姿があつた。

どうしたのかと聞いても、転んだだのぶつけただのと言つていたが……。

そして、そのことを妻に尋ねると……癩癩を起こして家中をめちやくちやにした。

それから、ことあるごとにタクへの虐待と僕への暴言・暴力、癩癩はエスカレートしていった。

（僕もそれになんとも怒り、時には手も出したが……止むことはなかった）

（そのころから、職場の同僚だつた今の妻に相談を持ちかけ、そこから付き合いが始まつたのだが……）

結局、一年前に交通事故で妻が死ぬまで、それは続いた。

「タクには悪いことをしてしまつた。父親だというのに、ろくに守つてやれなかつたし……」

「悪いのは、前の奥さんでしょ？ 自分を責めないで」

そう言つて、新妻が旦那の首に腕を回した。そして頭を抱える様に旦那の頭をなでた。

「ああ…そうだったな。とにかく、やっと1年経つて、前の嫁のこ

とは忘れかけてきたんだ。この一年、盛り塩を欠かしたことはなかったしな」

「盛り塩って玄関の前の……あれってそう言う意味だったの？」

「そうそう。知り合いの坊さんに言われてやってたんだよ。それも、玄関の前だけじゃなく、16方位全部に。それで、悪霊の防げるんだってさ」

「悪霊ってw」

「悪霊だろ〜あいつが戻ってきたら、なんて考えたらぞつとするな」

女はその会話を、ずっと聞いていた。

女は反省した。

自分では駄目だったと。母親としても、子どもになにもしてあげられなかった。

そして愛する旦那に、こんな苦勞をかけていたとは女は知らなかった。

自分じゃ、この人にはふさわしくない。

自分では……。

そう思うと、全てを持った新妻が羨ましくて仕方がなかった。

なぜ自分にはなくて、この新妻はあるのか。

どうしてこの新妻が、旦那と子どもの側にいられるのか。

この新妻じゃないと、家族とともにいられない。

そして、結論は出た。計画通りだった。

女は、旦那に甘える新妻にそつと近寄っていった。

そして、壁を抜けるときと同じようにして新妻の体と自分を重ね合わせた。

.....
.....

「おい、どうしたんだ？」

夫が、急に眠ってしまった新妻を揺さぶる。
そこで、新妻は目を覚ました。

「.....」

新妻は旦那を見つめる。
そして、いきなり抱きついた。

「なんだ？」

「愛してるわ」

「い、いきなりだな」

夫は照れて笑う。そして

「俺も愛してるぞ」

そう言った。

新妻は、それに、この上ない笑みを浮かべ。

「そう。嬉しい.....ふふふ」

そしていったん、旦那から離れた。

「ん？ どうしたんだ、一体。体調でも悪いのか？」

「ええ、貧血みたい。ちょっと散歩してくるわ」

「貧血なら、横になってた方がいいんじゃないのか？」

「いいのよ。歩いてたほうが楽だわ。それに、すぐ戻ってくるから

……あ、ついでに買い物行ってくるわね」

そう言って、新妻は出て行った。

旦那にばれない様に、……と、レインコートを持ち出して。

7話

一時間が経ち、男は家の前まで戻ってきていた。

少し時間に遅れてしまったが、どうってことはないだろう。

目をこらして、女の姿を探る。

だが、まだいないようだった。

すると

「こんにちは」

突然、後ろから声をかけられた。

そこにいたのは……

「え、ああ…… こんにちは」

新妻だった。

意外な人物が声をかけてきて、男は一瞬焦った。

男は、新妻の姿を見たことがあった。それで、目の前の女が新妻であると分かった。

だが、自分を知らないはずの新妻がなぜ声をかけてくるのか分からないかった。

そして、なぜか雨も降っていないのにレインコートをかぶっている。

「あなた、ずっと家の中見てたでしょ？」

そう言われ、ドキッとした。

まさか気づかれていたのか？ 確かに、外から家の中を覗かれています。不審者と間違われるのも無理はない。

「どう言い訳しようか……考えていると

「いくら探しても、私の姿は見つかりませんよ」

新妻はそう言って笑った。

その笑顔は、男の知っているものではなかった。

この間見た、愛情に溢れた家族思いの新妻とは似ても似つかなかった。

普通なら、決してしない、見下して嘲笑うような顔。

それだけで、男は全て悟った。

ああ、そういうことが。

「どうしたんです？ もう1時間ですよね、だからこうして出てきてあげたんですけど」

新妻は薄ら笑いを浮かべる。

男は新妻を睨み付けて

「……何をしているんです？ 新しい奥さんの体に入ったりして」
「……………」

新妻の中には、今、女がいた。

憑依して、体を操っているのだ。

その結果、外見は同じでも、新妻とは似ても似つかない黒いオーラのようなものがみえた。

おそらく、霊能力者でないと気づけないだろう。

「やりすぎです。すぐに出てください……さもないと、強制的に成仏させることになります」

そう言い、男は数珠を取り出した。
普段、除霊のために使うものだ。
念のために持ってきたが、まさか使うことになるとは思わなかつた。

だが、新妻……いや、女は話を聞いているのか分からない様子で、笑ったまま、男をまっすぐに見つめる。

「私ね……欲しくなっちゃったんですよ」

薄ら笑いを止め、語る女。

「夫婦円満で、みんなが幸せな家庭がね」

「駄目です。あなたはもう死んでるんです。生きた人に、これ以上迷惑をかけないでください」

男は油断なく女を見据える。

だが、やはり話を聞いていない様で女は続ける。

「でも、それは私じゃ無理だった。私じゃ幸せな家庭は築けない」

本当に残念そうに、女は語る。

「だから、ね。私もあの新妻になれば、ずっと家族と一緒にいられるでしょ？」

そう言い、両手を広げる。新妻の体を見せつける様に。

女の目的はただ一つ。

旦那の新しい妻の体に乗っ取ること。

だが、それが何を意味するのか、男にも十分すぎるほど分かって

いた。

喫茶店で聞いた話を思い出す。

可愛がっていた飼い犬を蹴り殺す異常な性癖。そして子どもを虐待する最悪な母親。

そんなものが、また蘇ったらどうなるか。せつかく幸せをつかんだ家庭が、またぶち壊される。

「すぐに出て行け！」

自然と言葉は荒くなる。

「いやよ。私はやっと、あの人のそばにいられるようになったんだから……」

女は寒気がする様な笑みを浮かべて、家の方を見た。

家では、旦那や子どもが新妻の帰りを待っているだろう。

女に乗っ取られた、新妻の帰りを。

「まあでも、あんたには一応感謝はしているわ。あんたが塩をどかしてくれたおかげで、家の中に入れたし。結界張られてたら、憑依できないしね」

「……お前……」

男は女を睨み付けながら、立ちつくしていた。

そして、自分の愚かさを恨む。あれはそういう意味だったのか、と。

よく考えたら、塩が浄化するのは、悪意を持った霊だけだ。

塩をどかして、女が記憶を取り戻した時点で気づくべきだった。

「お前のやってきたことで……旦那さんや子どもがどれだけ傷ついてきたか分かっているのか!？」

男は数珠を握りしめて叫ぶ。少しでも罪の意識があれば……と思っただが、女は涼しい顔で受け流す。

「あら、あれは私なりの愛情表現てやつよ。ふふふ……それにね、だからこの新妻の体が必要だったのよ。この体なら、うまくやれるわ。私じゃないもの」

そう言って笑う女は、この上なく邪悪だった。

体は関係ない。精神がこの女である限り、また同じことを繰り返すことは分かり切っていた。

「そうか……」

話し合いは通用しない。そう判断した男は、数珠を握りしめた。強制的に成仏させる。この悪霊を。

男は数珠を女に投げつけようとする。だが、それより女の方が早かった。

「あなたは、もう要らない」

女がいきなり懐に入り込んでくる……と同時に、胸のあたりが急に熱くなった。

「ぐっ……」

痛い。熱い。

電流を流された様な衝撃が、胸を中心に広がる。

顔を下げてみると、胸のあたりには包丁が深くささっており、シヤツは真っ赤に染まっていた。

「霊能力者さえ消せば、除霊される心配はないもの。幽霊のままじや敵わないけど、人間でなら殺せる」

女は包丁を引き抜き、男はその場に倒れ伏した。

そして、返り血のついたレインコート脱いで、その中に包丁をつむ。

「くそ……」

男は最後にうめく。だんだんと視界がぼやけて女の顔は見えなくなる。

ただ、笑い声だけが聞こえた。

「さて、と。今日は久しぶりに晩ご飯の用意しなくちゃ……何にしようかな〜」

レインコートと包丁を近くの川に投げ捨て、その足で女はデパートへと買い物に出かけていった。

「あ、お母さん、どこ行くの？」

途中、遊びから帰ってきたタクがいた。

「お買い物よ。一緒に行く？」

そう言い、タクの手を引く女。

これから、どう可愛がってやるか。それを考えると薄ら笑いが止

まらなかった。

……ということがあってね。偶然にも命は助かって、気づいたら病院のベッドで寝ていた。

それ以来、霊能力稼業は辞めた。

一応、その後調査はやつただけ……。何も分からなかった。突然引越してしまっただけ。

まあそんなわけで、僕はもう仕事はやらない。他を当たってくれ。男はそう言っただけで背を向ける。だが訪問者は男の腕をつかんで。

「……そう言っただけで逃げるつもりか？」

高校生ぐらいの少年。訪問者は男を睨み付けていた。

そして、笑う。

その気配を男はどこかで感じたことがあった。

その邪悪な笑みを……。そう、さっき話した女と同じ目だった。

「義母さんが変わってしまったのは、お前のせいだろ？ お前がちやんと除霊しなかったから。あれから親父も死んであの女と二人、ずっと虐待されていきってきた……。ついさっき、義母さんごとの女は殺したけど。お前にも責任をとってもらおう」

「……そうか。君がタク……」

そして、またあの感触がおそってきた。胸が熱くなる。血が噴き出す。

男はその場に崩れ落ちて、血まみれのナイフを握っている少年を

見た。

刺された場所は、ちょうどあの時に女に刺されたところと同じ。

「あの女の息子なんだ。俺は。そう考えたら反吐が出るけど……」

そして、男の意識は遠のいていった。

全ては自分のせいだ……後悔の中で、男は死んだ。

7話（後書き）

昔書きためてたやつです^^
前に見た深夜ドラマでこういう話があったような気がして自分なりにアレンジ加えて書きました。
名前付けるのがめんどくさかったんで「男」とか「女」とかそのままなんです…笑
楽しんで頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278f/>

ゆーれー

2010年10月15日22時23分発行